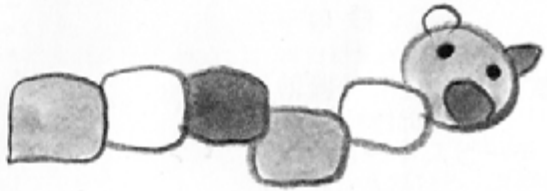
船団

第124号

特集

俳句史の先端



[連載 エッセイ]

4 日本語ノート㊻独り言 森山卓郎

6 今日の川柳㊾大きな音 芳賀博子

8 映画に恋して、俳句に恋して⑭多様性について 衛藤夏子

72 会員リレーエッセイ⑱続 亜未の俳句日記 藤田亜未

74 会員リレーエッセイ⑰こどもとことば 諸星千綾

[書評]

76 赤石忍著『俳句とエッセー 私にとっての石川くん』 宮川健郎

78 藤井なお子句集『ブロンズ兎』 久保純夫

80 川島由紀子著『阿波野青畝への旅』 三宅やよい

82 俳句トーク ひょこっと鳥の 坪内稔典・渡部ひとみ

106 会員作品

143 今号の15句 三宅やよい・木村和也・小西昭夫・塩見恵介・中原幸子

148 エンジンルーム

表紙・カット／山本真也 レイアウト／松山たかし・阪脇幸夫

[特集]

俳句史の先端

16 座談会「俳句史の先端」―俳句とはどんな詩か
宇多喜代子・坪内稔典・木村和也

31 俳句史という物語の語り直しかた 秋山 泰

40 混沌にある先端 三宅やよい

42 伸び続ける根 わたなべじゅんこ

44 日々の暮らしの中から 小西昭夫

46 ひとりにひとつ 中原幸子

10 俳句30句 青塚英子・十 一・川添光代

[評論]

48 時代と文脈から読み直す⑩
「第二芸術」？の桑原武夫？ 鈴木ひさし

60 芭蕉の近江、蕪村の京(1)―新都鄙問答 篠原 徹

中井　保江

どう生きるなんてさておき生ビール
白南風や甘口カレーひいひいと
リネン庫にリネン高々梅雨明ける
黒揚羽横切って高くもう光
老書家は墨に朝露ちょっと足す
秋冷の的を射る音軽き音
秋期澄む天平美人のおちょぼぐち

長沼　佐智

和ちゃんは無事か令和の雪来るか
紅葉且つ散る園児らは一輪車
冬木の実赤い実食べていいですか
月あかあかはずんではっと息とんで
あの角で男消えたり酔芙蓉
百歳の好々爺です今年米
そんなになやまずにきつつへ呼んでいる

能城　檀

豆腐屋の朝顔艶にして紫
深更のうろんな電波狗尾草
固定観念拒むコスモスゆらゆらす
塩むすびのてつぺん光る鰯雲
文豪は猫舌である冬帽子
眼裏に黒き波音冬暁
花柊煩わしくも愛しき人

波戸辺　のばら

天高しなんでもない日のお赤飯
メリメリと犬の脱糞風さやか
柿すだれ今日は一日ひきこもり
ぴかぴかと柿の輝くお仏壇
チーム「パプリカ」大南瓜コンテスト
PayPayで入る冬の植物園
奥さまの眼鏡にかなう石焼き芋

会員作品

中林　明美

友達の友達と行く夾竹桃
パンを焼く湯気立っている秋深し
歩いてる秋の言葉を拾いつつ
秋の朝一人の玉子割っている
秋に入る桐の箪笥に足を止め
十月の池に小鳥の一家族
秋の日の鞄にしまう青ノート

中原　幸子

秋出水九九は八十一ずっと
獺祭忌糸瓜忌子規忌ハイ元気
喜久ちゃん退院キンモクセイ蕾
表現の自由不自由ねこじゃらし
朝刊が夕刊がくる小鳥くる
紅葉かつ散るわたしなら忘れんぼ
まっ赤ひと粒これはそよごの実かどうか

火箱　ひろ

胎内に頭のできている月夜
沈黙の匂い光のなかの秋
道なんかなくたって来い曼珠沙華
石斧をつくる実習いわし雲
日雀つぴつぴ記憶の中の道がない
雑踏にぶつかる秋思いくつもいくつも
またねって軽い約束赤とんぼ

陽山　道子

とりどりの空き瓶五つ秋の窓
こんにゃくの角のところが秋の崖
夜が更けてぐうたらになるおでんさま
行く秋のトーテムポール放し飼い
秋の夜のテーブル拭いて終了す
素っぴんの人の集まるきのこ鍋
人を恋うつまりこうして落葉掻く

藪ノ内　君代

たぶんだが年相応な秋の空
以心伝心無花果をひとつずつ
どんぐりを拾う今日の旅ごころ
行く秋のひとり歩きのいつもの木
小春日のくねくね道が好きな理由
どこまでも行けそうな落葉ふみふみ
ぽんかんのぽかんぽかんというモード

山岡　和子

虫聞いているが読経も聞いている
いくつ叩けば気がすむの鉦叩
恋生まれしか虫の音のはたと止む
ビスケット一つ食べたら秋が来た
おにぎりを配る役あり茸狩
信長の頃の戦場茸山
木枯しが隠れているぞその角に

木村　和也

ポケットにレシート一枚星月夜
水澄むや楽器のようにならぶ骨
押入れを開けて案山子を出してみる
触診のあとの銀河の昏さかな
元素のようにかがやくものは冬の蝶
夕暮の中に正しき鶏頭花
病む時も健やかなるときも栗ごはん

坪内　稔典

窓四角あんパンは丸さて鴨は
あんパンに黒ゴマのへそ雪になる
あんパンと冬青空を歩いたよ
晩秋の粒あんパンといい仲に
あんパンとオレとの冬の大三角
秋晴れてあんパンたちに足がない
雪だ雪あんパンたちが寄り合って

会員作品

乳原　孝

湯を注ぎ罪のごとくに食ふ夜食
大の字のやさしき左大文字
ネクタイの戻る街並さはやかに
晩秋の手をポケットに仕舞ひ込む
コーラスの顔の華やぐ秋日和
キャラメルにおまけの宇宙天の川
足跡を溶け去る雪に残しをり

梅津　昌広

えんぴつで書く駄句ゆゑに季語はなし
蠅と書く蠅を文字として封じ込め
河馬が河馬に噛まれ河馬笑ふ鰯雲
欲触愛慢の色や鶏頭花
文芸を麻薬と思ふ夜長かな
親鸞を捨てにゆく施設小六月
初しぐれ老師を施設に捨てるなり

会員作品

池田　澄子

関西弁で言えば秋思をいらわれし
痛くない程度に抓り枯野道
風の音家軋む音梨噛む音
日がな雨リンゴに蜜のひそやかに
空気佳し水佳し晴れて福寿草
未亡人にも慣れ甘く煮る冬至南瓜
寒き夜のひとりのお茶の濃すぎたわ